

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：11401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2017

課題番号：24520134

研究課題名(和文) 古代ギリシアの音階理論のヨーロッパ中世思想への浸透

研究課題名(英文) Enclosure into the Middle European Thought of Ancient Greek Music

研究代表者

山本 建郎 (Yamamoto, Tatsuoh)

秋田大学・名誉教授・名誉教授

研究者番号：30006572

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の課題は、古代ギリシアにおいて誕生した音階理論の背景を哲学の問題関心から探るものである。それは、明治初期以来受け容れられてきたドレミファソラシドなる近代洋楽の基盤となる七音音階の楽理上の正当性を論理的に確認することによってなされる。その具体的な作業として、アリストクセノス『ハルモニア原論』を論理的に分析した。それに加えて、プラトン、アリストテレスを初めとする他の関連する著名な著作家の上記のアリストクセノス書に続く関連文書の関連個所の論理的な分析をも果した。その結果、以下に見る通り、上記のアリストクセノス書に基づくプラトンの問題の主張の真意の推定を果し、納得のゆく結論を得ることができた。

研究成果の概要(英文)：The problem of this study is to articulate the background of the theory of music which was born in the situation of the ancient Greek culture. This problem is performed factually with confirming the authority of the seven noted structure 'do re mi fas sos la si do'. As an actual work, I analyzed logically the theory of Aristoxenean "The theory of Harmonics". Moreover I analyzed logically the theory of music connected with this problem which were written by the famous wrighters of ancient Greek music beginning from Aristoxenus and Plato. Actually as a conclusion of this problem I was able to acquire this conclusion, although it is only within the conflicted circumstance.

研究分野：哲学

キーワード：楽音 音程 全音 半音 音階 オクターヴ エートス(情緒性) 和音

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究の課題は直接的には古代ギリシア文明において誕生した音階理論の背景を哲学の問題関心から探ろうとするものであるが、これは本邦のみならず国際的にもほとんど手が付けられていない斬新すぎる課題である。そもそも現在我々が言わば当然の事実として受け容れている「ドレミファソラシド」なるオクターヴをなす七音音階なる音組織も、明治初期に洋楽の絶対的とも言えるほどの基盤の一つ（短音階に対する長音階）として受け容れられてきた音階上の事実であって、その正当性を論ずるなどということは、通常の音楽愛好者のみならず、専門の音楽関係者にとってさえも、問題視さえされ得ていないままである。この状況の下では、七音音階は、もちろんそれなりの楽理上の必然性はあったはずではあるがそれはまた別段階の事実として措かれるとすれば、現在では言わば当然の音階上基礎原理となっているとも言えよう。

それだけではなく、この文化状況は、国際学会の領域においてもほとんど変わりはない。音階の起源などという事実は、いわば当然事としてほとんど不問に付せられているままである。世界各地の様々の民族音階に於いても、このオクターヴ音階の形式はいわば各種各様の音階の基準もしくは規範の一つとして、無条件に受け容れられてきた感もある。

(2) この形式の規範としての意味を探り、その由来を考えるなどということは、国際的にも奇特定の研究者によって断片的に取り上げられているにとどまり、楽理家においても、試論的に採り上げられているだけである。研究者本人自身の状況においても常に関心と疑問の対象でこそあれ、これまではそれら一般的な概説に依拠して具体的な状況を予想する以上には出ることができなかった。

しかも、研究者本人が研究対象としている古代ギリシア哲学の文献(主としてプラトンとアリストテレスの著作)においても、この七音から成る音階構造の叙述は敢えて言えば当然事として頻繁に表明されているのである。このギリシア文明に固有の事実に注目している間に、今回の科研費による課題が課せられたのである。この雲をつかむようなこれまでほとんど等閑視されてきた課題に対して今こそ具体的な接近をなす機会であると判断して、敢えてこの消耗で困難な課題に取り組んだ次第である。

2. 研究の目的

(1) プラトンが好んで採り上げる古代ギリシア音階の実際の形式を関連文献の検討により推定し、通常は等閑視されているプラトン哲学に秘められた音楽思想の本来の一面を探る。併せて、古代ギリシアの音階構造を復元して、それをプラトン哲学のエートスを最底辺において支える不可欠の形式の現れとして受け容れる。その視座からプラトン哲学の総合的な全体像の質的拡大を図る。

(2) 他面、プラトン哲学と好一對を為すアリストテレス哲学における音楽関連の議論の具体的な検討により、古代ギリシアにおける音楽思想の立体化を期す。プラトンに批判的なアリストテレスの音楽に関する叙述の内にプラトンの音楽観とは対照的な見解を探り、古代ギリシアの音楽思想の具体的な拡張を図る。これは、ギリシア文化史の不可欠の一環となるはずである。

3. 研究の方法

(1) まず、上述のプラトンとアリストテレスの文献に現れる音楽関連の叙述を系統的にまとめる。これだけでも、いまだ主題的に論じられることのほとんど見られなかった事象に対する対応であるだけに、音楽を中心とする文化事象に対するかなりの新たな独特の知見に達することが期待される。それにより、古代ギリシア哲学史におけるプラトン・アリストテレスの項目の内容の大幅な改善増幅を期す。

(2) 加えて、これが最大の課題であるのだが、古代ギリシアの楽理書であるアリストクセノス『ハルモニア原論』における該当箇所を文献学的考証の上に、解読して、古代ギリシア音階の復元に努める。アリストクセノスの思考態度ならびに思考内容は不思議にも現代風そのままなので、復元された古代ギリシア音階は現代の七音音階と全く変わらない。古代ギリシア文化はしばしば現代風に変わらないことが指摘されるが、アリストクセノスの音階構造に関しては、特に著しい。これもよく語られる古代ギリシアの不思議の典型的な一例であろう。さらに、その上で、プラトンとアリストテレスの著作に現れた様々な音階構造の具体的な意味(効果)をその形式に即して推定し、哲学知に裏付けされた総合的な音楽思想の成立の復元を図る。

4. 研究成果

(1) 古代ギリシアの1オクターヴの音階構造の推定された復元の分析により、その特異な情緒性の由来を確認した。それはわずかにオクターヴ音階における半音の位置の違いに依るに過ぎないが、そのわずかな差異が絶大な感性の違いを生むのである。この事実によりプラトンが既に気づいていたばかりではなく、それを楽理上の要諦として記していることに改めて音階の特殊性を認識すると共に、プラトンの音楽理解の正当性を感知した。これは、プラトンの哲学的思考の幅の広さとともに、底の深さをも暗示するものとして、受け容れることができる。さらに、この情緒性の内的な検討に際して、プラトン哲学の底辺を支える音楽思想の具体的な音楽現象との対応を推定し、プラトンの叙述に現れた音楽思想の現実化を図った。それは、プラトン固有の強靱な倫理観の根源を支配する思想でもある。それにより、従来は見過ごされていたプラトン哲学の種々の特異な表現にそれぞれに固有の具体的な意味を認めることができた。

(2) それにより、プラトン哲学の到達点と見做されている『ノモイ(諸法制論)』篇において論述検討されている諸音階の具体的な構造形式を推定して、実際の曲想を推測した。そしてさらに、その視点から、『ノモイ』篇の当該箇所にも楽理に即した新たな解釈を下した。これはプラトンの思考経過の楽理に関する特殊な一面の具体的な掘り起しを意味すると共に、それに伴う古代ギリシア旋律の固有の一面の復元によりプラトンの強靱な倫理観の根源に認められる古代ギリシア固有の感性の具体的な了解かつ感受の可能性をも期したものである。

(3) さらに、この了解によって、プラトン哲学の底流を為すと推測される音楽思想のこれまでは注目を免れていた隠された一面の具体的な了解にも達した。それは、表現すれば当然のこのように思われるかも知れないが、現代に生きる我々にとってはあきれるほどの(あきれて無視される恐れもあるほどの)大変な主張である。それは、善い音楽の具体的な形式(つまり旋律)の了解こそ人間の人間として生きるに値する知的生活の必要条件であるとするものである。これは、プラトンにとっては当たり前すぎる事実の確認に過ぎないかも知れないが、現代に生きる我々にとっては、はぐらかされたような、しかしまた息つく暇もないほどまでに追い立てられている思いに駆られる大変な主張である。それだけに、この主張に対してどのように応えるかという問題は、今後の我々のプラトン解釈にとって、過酷な重圧として引

き受けざるを得ない課題であると予想される。それはプラトンに接したからには付きまとう負荷であるとも言わなければならないであろう。

(4) 他方、アリストテレスに関しては、従来の固有の音楽観を底流とする存在論と認識論に関してほぼ全面的な確認に及んだ。特にその音階に関する叙述には、これまであまり注目されてはいなかった存在論上の具体的な意味が認められた。

5. 主な発表論文等(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 0件)

〔図書〕(計 1件)

『アリストテレス方法論の構想』
(2015年,知泉書館,244頁) 山本建郎

〔産業財産権〕
無し

出願状況(計 0件)

名称:
発明者:

権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:

〔その他〕
ホームページ等
無し

6 . 研究組織

(1)研究代表者

山本 建郎 (YAMAMOTO, Taturō)
秋田大学・名誉教授
研究者番号：30006572

(2)研究分担者

高木 酉子 (Takagi, Yuko)
朝日大学・歯学部・非常勤講師
研究者番号：20624399

(3)連携研究者 無し

(4)研究協力者

野村 正明 (NOMURA, Masaaki)